

報



會

會 岳 山 本 日

31

月 二 十 年 八 和 昭

木曾御嶽の話

木暮理太郎

今日は懐古の夕ださうです。これから思ひきり古い話をしてこの部屋中をかび臭くしてしまはうと思つたのですが、私の古い山旅は唯々ぶら／＼歩いてゐたので日記さへもつけないから、すっかり忘れてしまつたので、私の思ふ通りかび臭くならないのは残念ですが、しかし何といつても見て面白し登つて面白し讀んで面白く聞いても考へても亦おもしろいといふ山のことで、随分古い思ひ出があります。そのうちで一番よく頭に残つてゐるのは、初めて木曾の御嶽へ登つた時のことです。その話はいつか前にもしたことがあつたかと思ひますけれども、また一つ今夜お話しして見たいと思ひます。

なにしろその頃は中央線の汽車がまだ八王子までしか通じてないし、碓氷トンネルがやつと出来て汽車が通じて間もない明治二十六年、丁度私が二十でございました。何故御嶽へ行つたかといひますと、その頃私の近所に御嶽講があつて、その講中が參詣するといふので、それについて行つたわけなんです。しかし講中と同じ行をするわけではありませんとあれは毎日水ばかり浴びてゐるのですから。もつとも夏のことですから別に苦にもならないでしやう。朝起きると水を浴びる。夕方宿に着くと早速また水を浴びる。それがこの講

のお勤めなのです。その連中と一緒碓氷峠を越えて岩村田から長久保へ出て行つたのですが、その邊はあまり記憶に残つてゐない。たゞ和田峠の頂上で客をのせる馬が多いのと馬子が賃錢を受取るにすぐ側の林の中で賭博をやるのには驚きました。その時あの餅屋の餅を食つたが、どんな味だつたかすつかり忘れてしまひました。

それから下諏訪へ行つて見ると、入口の土間の揚げ板をあげてさあ足をお洗ひ下さいといふ、勿論草鞋ばかりです、見ると湯がどん／＼流れてゐる。なるほどこれは重寶だと思つた。足を洗ふとすぐそばに湯殿があつてそれに飛び込む、そして水行を済してからゆつくり晩飯といふ段取は講中には跳向きに出来てゐるが、お相伴の私には千松ほどでなくとも可なりつらい辛抱でありました。

翌日は鹽尻峠を越して洗馬に出てそれから木曾街道を下りました。途中なんでも奈良井の日野屋だつたと思ふ、そこに泊つた時、この家は白味噌の味噌汁が御自慢で、朱塗りの大椀に盛つて出す、何杯お代りしてもいい。いゝどころぢやない。

椀がからになるとすぐお代りを持つて来る。これには随分閉口しましたが、中には勇敢な奴があつて十二杯ぐらい平げた。今はあるかどうか知りません。外にも御嶽講の講中が幾組も泊つてゐるので、給仕の女達がもう澤山だといふ客の手からお椀をひつたくる、もういらない、もつとおあがりなご飯時には大騒ぎでした。

それから鳥居峠を越えて葦原へ下つてそこへ泊つたのです。夜になると小娘が花漬を賣りに来る。丸、四角、扇形などさま／＼の形をした小函に紅、淡紅、白などの花の蕾や開いたのを巧に接排して入れてある。主に梅、桃、李などのやうである。見た目には誠に奇麗だ、そしていつまでも置いてお色の變らないのが特色である。私は、これはお湯の中へでもほうりこんで、櫻の花の鹽漬と同じやうに食べるものだと思つたのです。それを三つ四つ買つて家へ歸つた後、熱いお湯の中に入れて見たけれどももちつとも形が崩れない。噛んでみると苦い。後になつて知つたことだがこれはたゞ飾つてをくものなうで、口にするとではないのださうです。それからお六櫛といふのがあります。これも今はないかも知れませんが、それを賣りに來ましたそれがどういふわけでお六櫛といふのか謂れは聞きませんでした。とにかく本物の黄楊で作つた特有な形をした櫛でした。鳥居峠には頂上に小屋がありまして、そうめんを賣つてゐます。冷たい水に浸してあるのでそれが非常にうまい。真正面に御嶽が見える。鳥居が立つてゐてそれに落首が書いてあつた。

お鳥居のやうに兩足ふんばつて山をにらんで拜むつらつきといふのです、ちよつとおもしろいと思ひました。

峠を下れば本當の木曾街道で、その頃は今とちがつて木曾街道もなかつた。

主 要 目 次

★木曾御嶽の話

木暮理太郎(一)

★日本山岳志のことも

8

★山の思出

高野 鷹藏(四)

★思ひ出話

藤島 敏男(五)

★研究欄

1 山岳研究講話 8

今 西 錦 司(七)

2 耶馬溪地方の山村語二三

竹 内 亮(九)

3 靴と鎌 〇 生(一〇)

★山の消息

(一〇)

日光雲龍峽の遺難

國立公園に建つ山小屋建

築設計圖案の懸賞募集

陸地測量部新刊地圖目錄

★會務報告

十二月定例理事會 會員大會

記事 新入會員 會員計報 退

會者 會員住所變更 新着圖書

★新任理事選任通知 (七)

★穂高潤澤の雪崩調査に就いて(八)

風情があつたように憶えてゐます。それは田部君もいつたけれどもわれは、どうも昔のことをひどくいゝように憶えてゐるのです。木なかでも實際はそれ程でもなかつたらうと思ふが非常に大きかつたように憶えてゐる。どうもさういふ傾向が、ある。その頃私は太平記を愛讀しておりましたが、山路雨無うして空翠常に衣をうるほすといふ文句があるのを思ひ出して、うまいことをいつたもんだとつく／＼感心しました。それは敷原から先へ行きまして宮越までの間は、雨側が追つて来て大きな木が立ちならび水碓や榎などもあつたやうに思ふが、繁り合つた葉がそよ／＼風に揺れて、其間から洩れる日の光が翠の縹を織りなしてゐる。その並木の間を通るとひやりと涼しい。しつとりした感じはいゝ氣持ちで、これが空翠といふのだなとおもひました。

それから福島の葛屋に一泊して翌日王瀧へはいつた。福島から木曾川を渡ると間もなくかなり大きな黒木の林が続いて、下を流れてゐる川は見ようと思つても見られなかつた。一と所脚の下に川を蹴む場所があつて矢張り木曾川と思つてゐたら、それは王瀧川で、いつの間にか右へ廻り込んでゐたのでした。其後に行つた時はもうそんな林はどこかへけし飛んでしまつてか少しも見られませんでした。その當時はそこに黒木の林が茂つてをった。動物園に行くと澤山飼つてあるあの縞栗鼠、私はそれを單に木鼠だと思つてをりました

が、それが澤山をりました。それに高い枝から可なり太い蔓が下つてをった。それにつかまれば上へ登れさうな太い蔓です。それを私は霧凧だとはかり思つてゐました。後で武田君にそれはシラクチブルだと囁はれたけれども、木深い木曾の方では霧凧でもだん／＼伸びて地へとぐと地中へ根をはつて大きくなるのだらうと考へてゐました。それがまたなにか／＼澤山ある。それを木鼠がさか／＼上つたり下つたりしてゐる。人を恐れる氣配もなく餘り近く跳び歩くので終ひにはそれを一匹捕つてやらうといふ氣になつて追ひかけました。が、のろいやうでも素早いので手捕りなどに出来る筈ありません。なにしろ黒木の林の中に栗鼠が澤山戯れてゐて餘り人を恐れないといふやうな光景は今では容易に見られないうでしよう。われ／＼が山へはいる頃には何處にも森林が非常に茂つてをつて、殊に黒木の森林であると、その中へはいるのが楽しみでもありまたなんだか恐ろしいやうでもあつた。そんな林の中では少しの物音——がきつと音がしてもすぐぞつとすゑ程緊張してゐたのです。さういふ森林が福島に近い木曾川や王瀧川の岸にずつと續いてをったのですがその後二年経つて行つた時にはもうだいが伐られてをりました。御嶽は五度ばかり行つてをりますけれども、行く度に木がなくなつて終にはすつかり昔の面影は見られなくなつてしまひました。

常盤橋から今では澤渡峠を越えて行きますが、私共はクズシロ峠といふのを越えていきなり田嶋へ下り、すぐ釣橋を渡つて王瀧に着いたやうに覺えてゐます。五萬の地圖で見てもどうもよくわからないのですが、尾羽林を通り崩越への峠の上から尾根傳ひに一四三三の三角點附近に至り、そこから西に下つたのかも知れませんが、長い峠路で大雷雨に遇ひ、それが舞ると正面に御嶽を仰いだことを覺えてゐます。次に通つたのは明治三十二年頃でしたが其時にはその道がなくて、ずつと下の方の峠を通りました。これは田部君がいつたやうに峠の解消とでもいふんではういか。鞍馬橋を渡つたのは更にその次の登山の時でありました。

王瀧では松原彦右衛門といふ人の家へ泊りました。今その家があるかどうか、大きな家だつたから多分あるだらうと思ひます。そこへ泊ると御嶽講の連中が二三十組も泊つてをりましたらうか、いよ／＼明日はお山へかゝる、今日は特にたび／＼水を浴びなくちやいけないといふので盛に行が始まる。水を浴びるといつても、御嶽教の教文を唱へながら流して又行場へつくばつて絶えず兩手で頭へ水をかけ、四五分経つてから最後に大きく胸から體へ懸るやうにする。それを二三遍繰返してやる。もつとも傍に湯が立つてゐて、寒くなれば湯にはいつてまたやるのです。さうして車座をつくつて、まん中に中座を勤める人が御幣を持つて坐ると、先達がその中座の前に坐る。さうして教文を讀みはじめる、さうすると早ければ四五十分、遅くも一時間過ぎには中座に御嶽さんがのり移る、つまり催眠術にかゝるのです。教文は神佛混合で、いろ／＼のお経や祝詞やお祓ひを讀む、高天ヶ原の祝詞からはじまつて不動様のお経までやる。ことに般若心經をよくやる。それは中座の人によく利くお経やお祓ひをやるので、ある中座の人は般若心經を最後に讀まなければ神様がのりうつらない。ある人は六根清淨の祓でないといけないといふ工合で、このことをお座をたてるといひますが、このお座が幾つも立つので、こちでは般若心經を繰返す。あつちでは高天ヶ原を繰返す。いづれも眞剣だから笑はれもしない。そのうちに中座の人が兩手で持つてゐる御幣をすゝと頭上へ上げて強く急に振り動かす、即ち神がのりうつたのである。そこで先達がいろ／＼何ひをたてる。たとへば、エー御前様、明日のお天氣は如何でせうといふ願である。すると中座は御幣の紙の上でパツと振る、その時の御幣の紙のかへり工合を見て先達が判斷するのである。氣のきいた人は實によく當てる。なか／＼おもしろいものです。中には水の浴び方が足りないといつて叱られるものもある。内所で何かよくないことをしたものは、大抵こゝで泥を吐いてしまふ、さもないと頂上まで登れないで必ず途中でへたばるといふことです。それから皆々自分の家のことを心配して何か變りはないかと何つて見る、大概ないといひます。ことによると誰の家に急變が起つたといふので非常に騒ぎ立てる組もあるさうで、それがだいたい當るらしいのです。訊ねて見ると易と同じやうに御幣の十三枚の紙の裏表の組合ひの工合によつて判斷する規定があるらしく、それをその場合に應じてうまく判斷しなければならぬから、先達はなか／＼むづかしい役だらうと思ひました。ですから氣の利いた先達がゐるとその講中はなかなか繁昌するさうです。中座は物を言はない場合の方が多いやうですが、中にはおごそかな句調で神意を告げるものもある。私などには抑揚の強い含み聲なので何を言つたのか少しも分らないが、先達は慣れてゐるので氣持よくてきばきと處理してしまふ。それから明日のお山が無事に済ませるやうにと皆中座の前に放射狀に足を投げ出して御幣でお加持をして貰ふ。これは足の疲れを癒す爲で私も一緒にやつて貰ひました。夫が済むとまた一しきり經文を合唱する。そして先達は其間に呪兵衛者皆陣列在前と唱へながら九字を切り、中座の肩から腕のあたりを撫でるのです。そして握り緊めてゐる指の硬直が弛むと、先づ御幣を取つて自分の袴にさし、更に何處か急所をうんと押すと、神は離れて中座は平素の吾にかへり、皆と一緒に讀經して、お座は終りとなる譯であります。

お山をかける朝の出立は早い、大抵午前三時か三時半、遅くも四時には銘々が松明を持つて出掛ける、昔の繪によく描いてある通りです。麓

のものは遠くから見られませんが、田ノ原から上ですと、もう假松帯で邪魔な木立がないから、一列の松明が行くのがよく見える譯です。途中に清瀧といふのがあります。そこへ寄つてまた瀧に打たれる、水量は少ないが高きは三四丈もありませうかそれに叩かれるとなか／＼痛い、瀧壺はなく平な一枚岩なので、般若心經を口誦しながら其下を往復すると經の終る頃には十過位も往復することになつて、背中は眞赤になつてしまひます。私も打たれて見ましたが冷たいのと痛いのとで異過で跳び出しました。随分頑張つても八九過やるともう參つてしまふ。慣れてゐる先達などは十五へんも二十へんもやりになるのもいゝかもしれません。それから俗稱神玉原を通り過ぎて晝も薄暗い黒木立の中を登りました例の太いシラクチ蔓があつたことを憶えてゐます。三笠山に參詣して田ノ原の小屋に休み、雲の去來する中を六根清淨を唱へながら王瀧口の頂上に著いたのは夕方でした。何にせお宮や石碑があれば一々杖を止めて拜み上げるので非常に時間を潰すので道は捗りません。こゝで私は一行と別れて、この池の小屋へ行つて泊りました。そして翌日は山を一廻りする積りで小屋の主人にいろいろ道のことを聞きました。なにしろ講中の登山者ばかりゐるのですから、迂闊な眞似をして、お山を荒すといふので暇れでもしては大變だとい

ふので、いろいろ注意をされた。御嶽講では御神符といふことをいひます。それは頂上に一の池、二の池、三の池、四の池、五の池といふて五の池があるのです。もつとも一の池には水のあることは稀で、四の池は水は流れてゐるが池にはなつてゐません。是等の池の水に半紙をひたしてそれを乾かして貯へ置き、病人があると夫を小さく切つて汲みだての清水に入れて飲ませる。それが薬になる。とにかく御神符は奥の池の水に浸したものを程利き目が著しい。二の池よりは三の池、三の池よりは四の池、四の池よりは五の池の方がいいのださうです。後には池の水を竹筒や瓶に入れて持ち返る人があるやうになりました。ところが三の池から奥へは餘程行を積んだ先達でないといふ。たいがい三の池で終ひです。二の池では餘り近いし三の池なら丁度よい。四の池となると恐ろしくて近寄る人は殆んどない。

X

三度目の登山の時でした。二の池の小屋の主人が、昨日東京から來た人でこの池で泳いだ者がある、勿體ないことをしたものだ、よく罰が當らないとぶり／＼しながら話したことを覚えてゐる。後でその話を梅澤君にしたところがその當人が梅澤君だつたのは驚いた。梅澤君が早く亡くなられたのは其の所爲かも知れぬといつたら、何を馬鹿な例の腹を突き出してワツハツハと大笑ひすることでしょう。ともあれ山を神聖なものと崇めてゐる講中の前で、目に餘ると思はれるやうな行爲をせぬやう／＼も注意されたのでした。二の池で泊つて、私は翌日起きて驚いた。あんなに澤山の高い山があるのを目に見たのは初めてです。先づ東の方を見ると、鼻につかへる位の近くに目八分の高きに長い山がある。其上には更に高い山があり、どこまで續いてゐるのか、先の方は柵引く横雲に隠れてゐるの、分らない、何山だか小屋の主人に聞いてもよく知らぬ。側に居た駒草採りの男が甲州の山で白峯といふのだと教へてくれました。賽の河原を過ぎて三の池まで來ますと、火口壁の上では幾組もの先達が池に向つて盛に九字を切つてました。見ると幾人か池の水へ御神符の紙を浸してゐる所でした。其人達の居なくなるのを俟つて池の畔に下り、東側の假松の中を辿つて繼母岳の頂上に出て振り返ると、梵天のやうなものを押し立てた四十人餘りの白衣の信徒達が池に向つて高聲に祈禱しながら九字を切つてゐました。下は眞青な池です。私は何だか恐ろしくなつて急いで四の池の火口壁内へ下りて、冷たい水の流れてゐる草原に腰を卸して暫く休んでから繼母岳を上り、高天ヶ原の最高點に立つたのでした。この附近までは駒草採りも稀にしか入り込まずと見えて、十も二十も花の咲いてゐる大きな株があつちにもこつちにもありました。私も五つ六つ採集して紙に包み、小屋に歸つてから主人に見せたら、ヤア旦那、二兩がとこ仕事しましたネと言はれて吃驚し

たのでした。こゝで來ると北の方の雲がいゝあばいに晴れて、いきなり鼻の先へ頭が小さく恐ろしく根張りの大きい山が現れる。それが乗鞍でした。おまけに乗鞍の南の斜面には大きな残雪があつた。御嶽では二の池の西側に僅かなかつたのですが、乗鞍には澤山雪が残つてゐたので、これは御嶽よりも高い山だと思つた。

更に後の方を見ると三つ穂の槍のやうな山が見える、支那人の所謂一柄三尖の槍に似てゐる。つまり槍と奥穂高と前穂高の三つが三叉の槍のやうに見えたのです。あれが小屋の主人から聞いた槍ヶ岳であらう。私はこの三尖が一個の槍ヶ岳だと思つたのです。穂高なんて名は知りもしなければ聞いたこともない。そのために穂高へ登りそこなつたのでした。私は四方の山を見てゐる中にぼうとなつてしまつて、殆ど夢中で五の池から摩利支天、一の池の三十六童子を廻つて小屋に歸り、其日の中に下山して宮ノ越に泊つたのですが、意識的に日本アルプスの山々を大觀したのは此時が始めてでありました。二度目に行つた時は、ちやうど二十八年で『日本風景論』を讀んでゐましたから御嶽はつたりで、立山を振り出しにどうしても槍ヶ岳に登りたいと思つて行つたのですけれども、案内者を備つて登るなんてことは知らなかつたのですから、なんでも山へは一人で登るものゝやうに思つてゐたのです。それで『風景論』を讀んでみると三千五百三十一メートルと書いてある。富士山のほかに高い山があるものだ、これはどうして登らざればあるべからずと思つて行つたのですが、註のところに時に雷鳥、熊、かもしけを見たと書いてあるので熊に恐をなして斷念しました。その時鳥々で穂高へ登つたらよからうといはれたのですが、そんな名も知れない低い山へ登つたところがいゝやうがないといふのでとう／＼登らなかつたのは今から考へると甚だ残念です。兎に角御嶽へ初めて登つた時が、日本にもこんなに高い山が澤山あるぞといふことをまぎ／＼と見せつけられたので、一番よく記憶に残つて居ります。

後になつて、ある日行きつけの本屋をちよつと覗いてみると『山岳』といふ雑誌が出てゐる。おや、これは大變なものがある。どんな人が書いてゐるのだらうと思つて開けてみると知らない名前が澤山列ねてゐる。さあ大變だ、世の中には山の好きな奴が随分澤山あるものだと思ひました。そしてそれは多分皆自分と同じ位の年配だらうとばかり思つてゐました。ところが後で知り合になつてみると皆な若い人ばかり、これにも驚いた。こんなに若い人々に山に登るなんて……。それがこの頃、見渡したところ孰れも小鬘に白髪のはいつてゐない人はいないので、懐古の夕といふような催しが出るのも止むを得ないことだと觀念した次第です。講演速記だけでは意を盡さないところがありますので少し補筆しました。木暮

日本山岳志 のことも

高頭仁兵衛

私は子供の時から山が好きでありまして郷里の二三百米突の小丘に登りまして喜んで居りました。十三歳の暑中に彌彦山に登りまして國の蒲原の平野の廣大な事と、國の殊に南部に群立を致して居ります幾多の山岳を望見を致しまして山岳の多いのに驚きましてあのやうな群山の中に猛獸や毒蛇が棲んで居るのであらうと想つて恐ろしくも考へました其後には多少の旅行をした人に逢ひますと山中に猛獸や毒蛇が棲んで居るか否やを聞いて居りました。併し其頃には交通が不便でありましたので、私は旅行と云ふ程の旅行は致しませんでした。十九歳の時に眼病治療のために上京を致しました時に雑誌の『文庫』を見まして、小島さんの文章を拜見を致しまして、山の好きな人もあるものだと思ひました。其時には文庫社が駿河臺下の南甲賀町にありまして、私の分家が白米商を致しまして神田の小川町に住居を致して居りましたので、私はちよいと遊びに行つて居りました。其家が文庫社の近い所でありましたのでしたから、某日に私は文庫社を訪ひまして、小島先生は聞きましてと店員がお留守だと申しましたので私はテツキリ山岳地へお旅行の事と考へまして深くお聞きを致しませ

ずには歸へりました。私は二十一歳の時にはじめて太郎坊口から富士山に登りまして須走口に下りました。翌年二十二歳の秋に郷里の八海山に登りまして母から登山厳禁を命ぜられた。そこで地理書を漁りまして山岳の記事を集めて嬉しがつて居りました。それが可なり分量になりましたので、他に私の一身上の事情もありましたので、それを出版を致して見やうと存じましたので友人の紹介で志賀重昂先生を御訪問致しますと志賀先生が、小島さんの白峰紀行の載つて居りました雑誌太陽をお見せになりまして「コンナ山の好きな人が有る」と云ふ前置きで、小島さんのお噂を致されましたので私ははじめて小島さんが横濱正金銀行にお勤めになつて居る人である事を知りましたのでありました。

私は其時には本郷の西片町に住んで居りました、ところがその時には文庫社が空橋の下にありました時でありましたので私は文庫社を尋ねまして、小島さんの横濱西戸部町の御住所を承りまして、小島さんをお訪ねを致しまして日本山岳志の増訂をお願いを致しました次第で有りました。私がいま一二年もお早く小島さんにお目にかゝつて居りましたならば、今少しく良い本が出来て居たかも知れませんでした。

×

それから辻村伊助さんが自分達も手傳ふから山岳志を増補訂正をしては如何と云ふお話しが出ましたから私が二三の見本を作つて御覽に入

れました上でといふ事でお別れを致しました。それは大震災の年の五月であつたやうに存じて居ります。私が房總半島を以て見本を作らうと存じまして、房總半島の二萬分一圖を毎日眺めて居りまして未だに見本を作りません中にアノ大震災で辻村さんは御逝去になりました。

×

たしか大正のはじめだと存じますが、時の日本山岳會の幹部が主となりまして日本アルプスの案内記を作つて見やうと云ふ事で、私が主となりまして各自に各方面を分擔を致しまして私が經めました上で全部を皆様に御廻しを致します事になりましたが、豫定の期日まで私の手に元を参りました玉稿は南アルプスの總論を御受持ちになりました高野兄御一人だけでありました。其の中に小島兄は米國にお出でになりましたのと、武田さんが東京にお出でがなくなりまして、何時とは無しに案内記の事は流れになつて仕舞ひました。

小島兄の米國行きは可なり早くから噂がありましたが、小島さんが御不在となつては山岳會の一大事變だと存じましたものでしたから、私と高野兄とで出得る限りのお邪魔を致して居りましたが、いづれの事情が出来ましたので、二人ともに胃を脱いで降参を致したのでありました。ツイ二三年前に冠さんが私の日本山岳志を増訂しては如何、自分も御助力を申すからと云ふお話しが出ましたので、私も以前のいづれの思

ひ出から致しまして増訂を致して見やうかと考へて居ります。何れ小島さんの御助力と武田、木暮の兄をはじめ皆様の御援助を仰ぎまして、今少々餘暇を得ましたならば気分だけでも若くなりまして、執筆を致して見やうかと存じて居ります。(校閱済)

山の思出

高野 鷹藏

實は先月の理事會に私がなまけて欠席したんぢやないんですが欠席しましたので、欠席裁判でかういふ會を開くからかつてプログラムをこしらへるといふので、どうしても私にやらなければならなかつた。で今日皆さんにお願ひしたようなプログラムが大體できたのであります。皆様の非常におもしろい話で、私がせっかつお話ししようと思つた話なんか武田君に先廻りされて話の種がなくなつた。ことに私は地震に遭まして危く命を失ふところでしたから、古い話はきれいに忘れて何も頭に残つておりませんはいんや新しい話は持ち合せがないので、私は思ひ出すまゝに斷片的にお話して、後で藤島君に中古の話をしてもらうと思ひます

山岳第一年第一號

いま武田君から山岳といふ雑誌の話が出たので、私はあれを一年一號出した時のことをちよと思ひ出しました。今の理事の方々には「山岳」を年三回づゝ出すのでないぶんお骨

折を願つてをりまして、私達是非常にありがたいと思つてをります。私達のはじめて「山岳」を出す時分に、一年一號の今でいふ編輯會議を武田君のお宅でやつた。その時に私達はいつたの雑誌はどうして作るんだか知らない。この活字は何號なんてさらに知らない。知つてゐるのは小島君一人で、小島君に手をとつて教えてもらつた。これが六號でこれが五號とその時分はポイントなんでものはなかつた——教えてもらつてようやく出来た、さうしてこれをどこで印刷をやるかといふことになつて、故人の城さんが市會議員をしてゐてなか／＼方々に勢力があつたもんで、城さんのお聲が、りで東京印刷へ頼んだ。そのかはり校正にわざ／＼深川の大工町の工場までわれ／＼は通つたもので、これにはいづぶん迷惑しましたが、をかげであの雑誌が出来ました。

あの一號を出す時分には口繪寫眞が實にありませんで、今は全く豊富にあります。あの中に出てゐる日光の寫眞なんかは日光の町で賣つてゐた寫眞で、あれは澤山賣つて来たんです、あれが今残つてゐましたら珍品で、その時分はPOPなんといふものが少くてあれは四つ切りの鶏卵紙へ焼いてある寫眞です。そんなものから借用したやうなわけで、その時分は材料に非常に困つた。さうしてあの雑誌がどうやらかうやら出来たのであります。今考へますと今昔の感にたへないのであります。

草鞋と山の食糧

そんな話はそれくらいに致しまして、先程赤石行きの幻燈をだいた映しました。あの時の一行が小島君、中村君、高頭君、三枝君、私といふうな一行であります。あの際に食糧係を私が勤めたので、これは山岳に書いてあります。私はいろいろ困った話を思ひ出します。第一に今でも一番はつきり頭へ残つてゐるのは草鞋であります。人夫から何からまぜると十何人の一行でありますからそれが約一週間の旅をするわらじの数といふものは非常なものであります。それを集めて計つてみるとちやうど人足一人の背中一ぱいになつてしまつた。さういふようなことで、このわらじには非常に困りました。その後いろいろ工夫して方々のわらじ、支那、臺灣あたりのわらじも私は集めてみました。それから材料も芋だとか藁とかいろいろなものを使ひまして、その試験をよく木暮君に頼んだ。作つちやはいてもらふのですが、木暮君の足にはずいぶん豆が出来たことだらうと今考へてをります。さういふ試験の結果として最後の結論に達したのは、やはり藁のわらじが一番具合がいゝといふことでした。今でも芋で作つたわらじがぶら下つてゐるのをどこで見ましたが、あれなんか靴の上へはくわらじなにかもしませんが、芋で作つたわらじは丈夫であります。繊維が細いものですから川を渡る時なんか非常に滑つて、ほとんど渡ることが出来ないことがよくありま

した。

それから食物であります。今とちがつて鍋釜を背負つて行く時代でありました。醤油を持つて行く。どうも醤油を持つて行くに嵩ばかりとつて困る。その時に、たしかあれは日露戦争の遺物だったのでございませう。醤油エキスイといふものがある。ちやうど醤油を煮つめたやうな恰拵のもので、ざら／＼結晶したものが罐詰になつてをった。それをぼごして溶かすと醤油のやうなものが出来るのであります。非常にまづくて醤油の味なんかないのであります。それで高頭君の發案で、今は無くなつた筈であります。下谷にあつた伊豫紋といふ江戸時代からの有名な料理屋の板場に頼んで鰯甲萬を二升を升に煮つめてもらつた。さてそれを入れるものがない。ちやうどわらじ／＼が學校時分に習字のお稽古をするのに使つた竹に穴をあけた水入れがあつた。それがいゝだらうといふ話が出た。それがいゝ小きくても、それで一升樽——一升樽といつてもあまり御存知ないでございませう。とにかくそれに繩をぐるぐるまいて醬油を煮つめたものを入れて人夫の負子の後へぶら下げて歩いたのであります。鎌尾根を歩いてる中に人夫が尻餅をついた拍子に底を抜いてこぼしてしまつた。その跡を横君が通つて、兎に鹽をなめさせるために持つて行つたんだなんて宣傳された。すが、さういふわけぢやあなかつたのです。

それから、なにしろ雪を鍋で溶かして米を洗ふといふやうな始末であります。米を下界で洗つて干して持つて行つたことがあります。これはたんと持つて行けばむろん變質しますから永續はしません。それから今でも私がこれはうまいことをやつたなと考へてゐることは、味噌を持つて行くのに裏漉ししてそれに鰯節を入れてそれを鍋で煮て出来るだけ水分を除いて持つて行きました。さうすると容積が少なくて割合に効能がある。そしてうまい。その他持つて行くものは、その時分は今とちがつて罐詰なんといふものも澤山ない時代であります。干鰯とか鹽鮭みたいなものです。その他わかれ持つて行つたりなんかしました。一べん鮓を持つて行つたことがある。鮓は軽くて、味噌汁の中にもぶち込めば大きくなる。ところがこれは大きな失敗で、持つて行くうちにこた／＼になつてしまつて、結局捨てました。

幻燈作製の秘傳

だいたい時間がたちましたからそんな下らない話はそれくらいにしまして、きつち幻燈の時に、なぜ今寫眞を撮す方が幻燈をお作りにならぬかと申し上げましたが、私があの幻燈をさかんに作ります時代、どうしてもうまく出来ない。その時分は東京にもいはゆる幻燈屋といふものがありまして幻燈を作つてをりました。が、東京の幻燈屋は非常に下手だつた。結局、横濱に今でも山岳會が作らせます。江南といふ寫眞屋があります。これは西洋人向きの寫眞屋で、日本風景とか風俗といふやうなものを賣る店です。そこが非常に幻燈がうまい。でそこでよく作らせた。昔は幻燈といふものは濕板でなければうまく行かないものだと思つてをりました。その店では今のやうな乾板できれいに出来る。それで何かコツがあるのだらうと思つて、かまをかけて、向ふは商賣物ですからなか／＼教えてくれな。こつちは材料屋には一生懸命奉公してをるわけでありまして、どうしてもうまく行かない。そのうちに江南へ行つて話のついでに、その主人が、幻燈は抜けばいゝんですよ、かういふことを一口いつた。それから私はハツと氣がついて、すぐやつてみると何でもないことなのであります。それは、幻燈を作る方法は御存知の如く種板からカメラでひき縮めればいゝのであります。それを十分露出をして、さうして現像する時に——むろん現像はハイドロキノンの強い現像液を使ふ、それを乾板の膜面が眞黒になつてもかまはず現像する。さうして影の部分が板の裏面まで黒くなるまで現像する。つまり普通の考へから行くとうにもならないやうにまづ黒に現像してしまふ。さうして後で抜けてしまつたところを現像をやめまして、これを赤血鹽とハイボーで抜くのです。それで此のフアーマの減力液の特長としてハイライトが余けいに抜けますから、それを注意しながら抜いて行きますと十分ハイライトが抜けた、普通より

はドギツイ板となります。適當のところを止めきへすればいい、わけです。かうやりさへすれば誰方がやつても幻燈はわけなく調子よく出来るのであります。おそろく今あまりお作りにならぬのはその秘傳が傳はらないせいだらうと思ひます。これは二十年前のときと秘傳ですが一つ御披露してこれから澤山作つていたゞきたいと思ひます。これは紙へ作るより簡単です。ことに小型のカメラが行はれる今日でありますから、さつき映しました赤石の寫眞極く小さな板から作つたもので、それを用ゐてもあの位に行くのであります。今のような精巧な器械なら尙更うまく行くだらうと思ひます。まだ斷片的の話は澤山ございしますが、あと藤島君に頼むために、私の話はこれでやめてをります。(校閲済)

思ひ出話

藤島 敏男

私は只今勤めの都合上秋田の方へ行つてをります。最近少しばかり暇を得まして東京へ來ようと思つておりましたが、ちやうど今日小集會があるやうに山岳會のメモに書いてございまして、それに出席して皆様にお目に掛り、またいろいろお話を伺ふのをたいへん楽しみにしておりました。ところがこちらの方では別に私は來るといふことを誰方にも申上げなかつたのであります。どうういう譯ですか、私も今日話をする

といふことにきめて、葉書に私の名前を刷つて方々へお出しになつたらしい。日本山岳會といふのは昔からたいへん人使ひがあらいいふことを聞いてをります。今晚お話になつた方々は、人をあらく使はれた方、或はまた人からあらく使はれた方、いる／＼あるようでございますが、とにかく日本山岳會は非常に人使ひがあらいいふことに就て御異存はないと思ひます。また人使ひがあらいいふことに、一度押しつけられたらなか／＼拒絶出来ないのが日本山岳會の特色です。これも私が東京に在りましていくらか會の仕事に携はつてゐた時分に経験したことでありすが、今もたぶんさうだらうと思ひます。ことに今日の司會者は小粒ながらなか／＼業の早い角田君でありますから、到底これは断はりきれないと思ひます。何か申し上げることに致します。

今日は懐古の夕といふのにふさはしいように、日本の山登りで今から思ひますと神々の治し召すといふやうな時代の方々がお話になりました先程から拜見してをりまして、だいたいお取の方から後光がさしてゐるような方が多いようであります。その神々のお話、つまり神話があつたわけでありすが、さういふような神話の後で私のようなまだ若い者がことに今晚の神々は別としても他の方々でも私よりは齡の上からも山登りの上からもはるかに先輩の方々がこの席にお見えになつてゐますのに私ごときものが懐古談といふようなことを申し上げるのはどうかと思はれるのであります。

私は御覽のようにまだ山登りはこれから大いにやらうと思つてをるくらの若い年でありますから、あまり古く山へ登つたことはいないのであります。先程からお話に出ましたことは、或は私の産れる前、或は私が西も東もわからない時分の話がいろいろであります。ことに私はどちらかといふと山登りを晩く始めたものでありますから、たとへば日本アルプスなどもはじめて行きましたのは大正六年、大正六年と申しますと小島さんなどはもう日本アルプス探検時代を終つてアメリカに渡られた後で、到底昔といふところに屬さないだらうと思ふのであります。ただ私が登つた山でいくらか今とくらべて昔を懐ふといふような感じを持つのは、近頃非常に人氣のある上越國境でちようど三國峠と清水峠の間の一の山について、自分の登つた時分と今とくらべるとたいへん變つてゐると思ふことがあるのであります。

私が仙ノ倉とか谷川岳といふような山に参りましたのは大正九年、千九百二十年であります。今でも會員でをります。森喬君といふ私の一年先輩の人と二人であつた山の山に登つたのであります。これは今では非常に樂な日歸りの山になつてゐる殊に谷川岳はその東面が岩登りの練習所となつて、實に人氣が出てゐるのであります。當時はまるで人が願みない山でありまして、どこから登るのかもよくわからないし幾日か

へはいつたこともありません。さういふような、今から思へば日本の山登りの神々の一人である非常な先輩と旅行をともし、またそれからいろいろの機会にお話を伺つたり書かれたものを讀んで、私は最も直接にこの二人の先輩から影響を受けた。その他の今夜お話になつた大先輩からもお話によりました書かれたものによつて非常な影響をうけて來たのであります。私の山登りが、さういふ日本で山登りを本當の意味ではじめられこれを育て、來られた先輩から直接に影響をうけて始めたものであるといふことは、私がそれ以後今日まで山を登つたり或は山を眺めたり或は山を考へたりする場合に大變役立つとおもふのであります。それが一人であつても或は自分の仲間と一緒にの時であつても、私は若い者だけの一人よりにならずに、いつでも先輩から享けたものを心の内に思ひ浮べることが出來たのであります。近年は山について書かれるものも或は話される機会も非常に多くなつたため今夜こゝでお話になつた古い輩方の影響が直接若い人々に及ぶやうな機会は却つて少なくなつてをるやうに思はれますが、私自身は幸ひにしてさういふ古い方々の影響を直接うけて山登りをしておりますのは、いろいろの意味に於て非常な幸福であるといふことを感じておると共にこの機会にその先輩の方々に感謝の念を表したいと思ふのであります。

今晩の懐古の夕といふ催しにつきまして、私のいま申し上げたことは或は非常に個人的であつて、ふさはしくないと思ひますけれども、たゞ自分の考へてゐることを簡単に申し上げます。(校閲済)

第六十回小集會「懐古の夕」の講演速記は今回を以て終りと致します。尚以上の外に、田部重活氏の御講演になつた「多摩川上流の今昔」と題する興味深い印象記があるので、最近田部氏が御多忙の爲、校閲をして下さる時間がなく、遺憾ながらこの機会に譲ることと致します。(會報係)

「山岳」合本用ケース

1 上質バツクラム(灰青色)
背、山岳第何年、西暦を押す。
ヒラは両面に會章を押す。

2 前後見返しに英名書伯筆。

3 一年分合本用ケースのみを所用の場合、五十錢(送料本會負擔)

4 雜誌を本會へ送付され製本料共

5 一回(返送料本會負擔)

6 會報編込用表紙

1 ヒラは濃緑色レザー、會章押捺

2 背は濃紺色クロス。

3 代金四十錢(送料本會負擔)

會員優待券の發行

本郷、美滿津商店は、例年の通り本會々員に限り、冬期運動具購入に際し優待をなすことになりました。優待券御希望の方は、當ルム迄お出下さるか或は送料二錢封入申込まれます。

新理事選任通知

明年度理事改選に際し、改選せらるべき理事六名に對し役員總會より同数の理事候補者を推薦致し十一月中會員各位に御通知申上げ各位よりの候補者推薦を待居候處締切日たる十二月五日迄に御推薦の向無之改選すべき理事の數と同數と相成申候、從て兼に役員總會の推薦したる五名の理事候補者は會則第十二條並に細則二の(ト)に據り投票を行はずして當選、明年一月より就任せらるゝ事に決定致候

新任の六氏(逸見眞雄氏、飯塚篤之助氏、松方三郎氏、三木高峯氏、三田幸夫氏、島山悌成氏)は何れも深き經驗を有せらる方々にて本會今後の活躍見るべきもの有之と被存候、何卒會員各位に於かれても倍舊の御支持御後援を賜はらんことを奉懇願候

尙各理事の事務分擔は決定次第會報誌上にて御報告可申上候、右不取敢御通知迄 敬具

昭和八年十二月

日本山岳會役員總會
會員各位

山岳研究講話 8

今 西 錦 司

海洋の影響

垂直分布帯の不鮮明さも除じつめると、結局それは我々海國日本の地理的諸條件が然らしめてゐると云ふ事に歸結した。そして海洋の氣候なる言葉を今迄にも餘りに屢々用ひ過ぎた嫌ひがあるから、この邊で還境としての海洋の影響をも少し詳しく考へて見る事したいと思ひます。

先づ海洋の氣候に及ぼす一般的影响と云へば、水は比熱が大であるからして夏に於いては、海洋上は陸上の様に氣温が上昇しない。又前者に於ては蒸發に依つて奪はれる熱量が、相當大なる事を考へに入れておかねばならない。水は熱容量が大であると云ふ事は、冬に於いては、海洋上に陸上程に冷却しない事を意味する。その上、水蒸氣に依つて、海面からの放熱が再び吸收され、輻射される。それ故海洋の氣候と云ふ名の下に、我々は一般に、夏が涼しくして、冬の暖かい海岸地方の氣候を想像し得るのであります。

けれども同じく海洋と稱しても、其處に流れる海流が暖流であるか、寒流であるかに依つて、其の土地の氣候に及ぼす影響が異つて来る。又かゝる海流が海岸からどれ程隔つた處を通つてゐるか云ふ事も知つておく必要がある。我國では、南の方からは黒潮と云ふ暖流が流れて來反對に北の方からは黒潮と云ふ寒流

が流れて來てゐる事はよく御承知の事と思ふ。

それとともに考へねばならぬ事は風向きであります。いくら海洋に面してゐても風が無ければその影響を受ける事は甚だしい。又風向きの如何によつては、折角海洋に面してゐ乍ら、その恩恵に浴されぬ場合もあらう。例へばアラビヤの様な處は、海岸から砂漠が横つてゐる。それ故海洋の影響と云ふ事は、もつと端的に云ひ表すならば、海洋から吹いて來る風の影響と云ふ事になるのであります。

以上を前提として、我々國の風向き、主として本州に於ける季節風の方向を見るに、夏は東南風が卓越し、冬は西北風が卓越する。これはその季節に於ける氣壓の配置に依つて定まつてくるのであつて、こゝでは詳論を避けるが、大體を云へば、アジア東部に於ける水陸の分布狀態からして、夏は大陸内部が熱せられてこゝに低氣壓を生じ、冬は反對にそれが冷却されて高氣壓を生ずる事に原因してゐる。が、何れにしても四面海を以つて圍まれた所では、どちらから風が吹いて來ても、多少なりとも海洋の影響を受けぬ様な事はないのであります。

然らば我々國氣候の受けてゐる海洋の影響とはどんなものを云ふか。

雨量の豊富な事とか、湿度の高い事とかは常識的にでも考へられるが、之を歐洲西北部地方の典型的な海洋の氣候と比較すると、そこに多少の相違が認められるのであります。即ち夏が涼しいかと云ふに、緯度の低い關係上、陸地はドン／＼熱せられて、海洋による緩和は餘り顯著でない。但し千島、樺太邊りまで行くと寒流の勢力が相當旺盛である爲、その上へ南方から暖風が吹いて來ると濃霧を生じ、これに依つて夏の氣温が昇らなくなる。

夏は涼しくなくとも冬は暖かいかと云ふに、これも大して暖かいと云ふ譯には行かない。冬の氣候を緩和する上に於いて、初めて暖流の効果が顯著となつてもいゝ筈であるが、冬には寒流が勢を得て、比較的南方にまでその影響を與へると思はれる以外に、太平洋岸を流れる黒潮の位置が、夏よりも沖合遠くなつて了ふ事も考へて見るべきである。併し冬の暖かくない原因として第一に指を屈しねばならない事は、大陸内部が過度に冷却される爲に、そこから吹いて來る西北の強烈な寒風は、到底日本海のみを以つてしては暖め切れない處にある。そして夏はいくち冷たいと云つても、その冬の低温を恢復するに足る丈高温ではない爲、從つて本州各地の年平均氣温が、同緯度の地に於けるそれらの平均よりも低いと云ふ結果になつてくるのである。但し同緯度に就いて見る時には、日本海岸の方が太平洋岸よりも幾分か高いが、これは或ひは日本海

側の暖流の影響に歸せられるべきものであるかも知れないのであります。それ故例へば敦賀の氣温が四月に於いては京都のそれよりも低い、十月にはその反對に敦賀の方が京都より高く、又兩地ともに十月の氣温は、之を以つて海洋の影響と見做す事が出来るのである。けれども、英國やノールエーの如く、冬季と雖も濃霧に依つて著しく暖められる地と比較して論ずるならば、我々國の所謂海洋の氣候と云ふものに對して直ちに、夏は涼しくして冬は暖かいと直譯的な解釋を下して了ふ事は出來ないのであります。

それよりも我々國に於ける海洋の著しい影響の一つとして、我々の見逃し難い事は、日本海側に於ける冬季の深雪であらう。その原因については、専門家間にあつても未だ詳しく事が解つてゐないらしいが、要するに大陸から吹く寒い乾燥した風が日本海上で暖められ、充分の濕氣を含んで、それが再び雪となつて降つて來るものであるらしい。それ故日本海が無ければ乾燥した風が濕潤とはならない譯だし、又日本海はあつても、それが湖水であつたり、或ひは寒流のみで冷却された海であつたりしたならば、寒風の暖められる度合がずつと減少して了ふから、從つて雪の降る量も減るであらうと想像されるのであります。

それではかゝる海洋の影響が、山

地生物の分布状態にまで、どんな風に反映して来るのであらうか。例へば森林限界に就いて云へば、一般に海洋的氣候下にあつては、その限界線の高さが降り、大陸的氣候下にある時は、逆にその高さが上昇するものとされてゐる。そしてその理由も今日の處では尙充分に明かにされてはゐないであります。雪線の高さがその土地の氣候に對して、矢張り之と同じ様な關係を現して、森林限界線に平行して来る處から見ると單に氣温だけで説明のつく問題ではなくて、寧ろ降水量の方を相當重要視しなければならぬのではなからうかと思はれる。

之を北アルプスに就いて調べた結果では、例へば立山山脈と後立山山脈とは黒部川を隔て、東西に對峙してゐるが、前者は直接富山灣に面してゐて、その間にあつて海洋の影響を妨げるものがないが、後者にあつては西に立山山脈と云ふ障壁があり東は本州中でも比較的大陸的氣候を呈する信濃高原である。かゝる地理的條件の爲に、北アルプスに於ける森林限界線の高さが、概括的には二五〇〇米附近にあると云ひ得ても、その個々について吟味するならば、立山山脈ではそれが二三五〇米、後立山山脈の鹿島槍以南では二五四〇米と云つた様な値が出てくるのであつて、又同じ立山山脈でも、海岸から遠ざかつて前山が重複して来ればその高さは高くなり、後立山山脈でも北の方へ行つて海岸に近づけば、その高さは次第に低下するのであり

ます。

同じ事は地形的雪線（上位萬年雪の下限界）に於いても亦認められるのである。即ち立山連峯に就いて云へば、その高さは約二七〇〇米であるが、之に對する後立山山脈の南部には、地形的雪線として認め得べき様な萬年雪がなく、勿論それ以南に於いては、槍、穂高と雖も今日地形的雪線を認め難いのであります。然るに後立山山脈も白馬岳まで行くと約二七五〇米に地形的雪線が認められる。それ故今日の日本アルプスには、よし氣候的雪線が存在しなくとも、もし日本アルプスが更に高くても、もし日本アルプスが更に高くても、氣候的雪線が突破する程の高さにある事を假想するならば、その氣候的雪線も現在の氣候状態の下にあつては、矢張り森林限界線や地形的雪線と平行して、その北部に於いて低くその南部に於いて高い様な、一つの傾きを示すであらう事は想像に難くないのであります。

×

こゝに於いて當然問題となつて来るのは北アルプスに残されたカール地形的高さであります。その高さを以つて、略々氷期に於ける氣候的雪線の高さに對比され得るものとするならば、潤澤のカール底の高さも、立山のカール底の高さも大して變らないのであるから、その平均の二五五〇米と云ふ値と、現在の森林限界線の平均の二五〇〇米と云ふ値との間には、その内容に於いて著しい差があるわけである。即ち現在の限界線がすべて北に低く、南に高い傾きを

有するにも拘らず、氷期の氣候的雪線は南北に殆んど傾きを有せぬ水平的なものであつたと云ふ事になる。更に眼を轉じて南アルプスを見ると、こゝでも矢張りカールの高さが水平的である。そして南アルプスだけについて云ふならば、その雪は富士と同じ様に、主として太平洋側から齎らされてゐるのである。しかもその雪量の點では、北アルプスの北部と比較にならぬ程少ないのに、カールの高さは之に比例せずして、南アルプスと北アルプスとは約百メートルの差を見るに過ぎない。

そこでこの難問題の解決に當つては、自ら二つの見方に別れて来るだらうと思はれるのであります。その一つはカールを以つて過去に於ける氷雪の作用で作られたものとは考へずに、何か他の原因にその説明を求め様とするものであり、他の一つは氷雪の作用で出来た事を認めるが、併しその爲には過去の氣候状態として、現在とは全然その趣きを異にして、海岸の影響を研究する立場であるこゝに私はこの後者の立場から次の様な推論を與へておかうと思ひます

×

降雪量は少くとも、寒冷でさへあれば残雪は豊富となり、閘谷水河位なら、それで充分發生し得る。但しカールの高さが揃つてゐる事から判斷すれば、その頃には太平洋側からの影響と、日本海側からの影響とが今と同様に、冬季に於いて著しい差があつてはならない。それには對馬海峡の開鎖と、それに伴つて暖流で

ある對馬海流の日本海への流入が遮斷されねばならぬ。その爲に日本海側の降雪量は今よりずつと減つても夏に於ける氣温の降下が之を代償して、残雪状態を平均せしめるであらう。日本全體の地盤が今より高かつた事は、地質學の方で既に認められてゐる處だから、従つてその時代が確定されるならば、又カールの出来た時代も判明するであらう。そしてその時代と云ふのが私の前々回に於いて既に述べました様に、シベリヤの寒冷となつた時代と一致するものであるならば、山地の北方系動植物は何も海峡などを渡らなくとも、陸續に移住して來られたと云ふ事になるのであります。（續）

穂高潤澤の雪崩調査に就て

潤澤池の平に建設計劃中の本會山小屋に關する報告は會報廿八號に發表の如く、更に一ヶ年間當地の積雪及雪崩の危險に就き研究調査することと決定致しました。

この調査の爲に、去る十月及十一月の二回に亘り、本會理事池ノ平に赴き、雪崩並に雪崩の調査標を七ヶ所に建設した次第であります。

就ては會員中にて、今冬より來春四、五月頃迄に同地に登山せられる方々は、是非とも今回の調査に御助力を得度、雪積量、天候、及び調査標柱の状況等の觀察を御報告願ひ度存じます。

山小屋委員

調査標の位置

潤澤池ノ平の北穂高寄り臺地の岩壁が即ち小屋建設候補地にて、之を中心として七ヶ所にあり。各々約三十尺の高さあり、約四尺巾にてH型に建て、雪崩の崩落を豫想する方向に對し直角の角度を保つ、各標柱には赤旗とナンバーを附す。

- 1 小屋位置を示す。岩壁に密接す。
 - 2 1の左下方
 - 3 岩壁の上方、臺地の中央
 - 4 3の左上方、潤澤岳及北穂高の鞍部に面す
 - 5 池ノ平の小さい岩小屋の下（池ノ平より優松帯の登山道を登り詰めた個所、潤澤の岩小屋に非ず）
 - 6 5の下方、優松帯にあり
 - 7 積雪量の調査標にして、1即ち岩壁の下方に建つ
- 調査要項
- 一、調査月日時間、報告者氏名
 - 二、天候、氣温
 - 三、積雪量（標柱7による）
 - 四、雪崩デブリーの有無、其方向
 - 五、標柱にデブリーのかゝれるや否や、標柱が雪崩に倒されたるや否や
- 追記
- 尙昨冬の調査に際して作製せる横尾谷の概念圖（二萬五千分一）及池ノ平より見た穂高の見取圖が若干枚あります。今回の調査に御援助下さる方にて御入用の場合は事務所迄御申越願ひます



研究欄

耶馬溪地方の山村語二三

竹内 亮

先般豊前の耶馬溪地方を視察する機会を得たのを幸ひにその地方に行はるゝ山村語の採集を試みたのであるが先生のおすゝめもあり、少しくここに書きつけて置くことにする。

一、地形に關するもの

ソネ 筑前方面でのヲ(尾)に同じでつまり尾根である。

耶馬溪の奥の守實に近い一尺八寸山(ミオー山)の中腹の長尾野附近で里人にその山頂への路を聞いたらすぐ上の屋根を指して

「ソネ イキアアンタ スグイ クデ」

と教えて呉れた。

ツジ 一般に高い尾根を云ひ時に山頂の意味にも用ひられることは筆者が「山岳」第廿七年一號に報告したと同様である。

ダイ 臺の漢字があてられる。耶馬溪地方は一帶の火山性の高原であるが、その内でも特にメーサ或はビヨ

ートと云つた地形に對して用ひられる。鐵城臺、鹿熊の中臺、松原の下臺等はメーサに屬し、南北兩内匠臺の如きはビヨートに屬する。豊後ではデーと云ふことはかつて報告した通りである(山岳第廿七年一號)

ドーリ これは非常に珍らしい言葉だと思ふ。耶馬溪の津民村榎木谷で用ひられ訛つてゾーリとも云つて居る。榎木谷の奥にナメシと云ふ谷とはさんでウメノキとオビノキの二岩塔(鰐水博士の説によれば、これは標式的な熔岩のダイリで非常に珍らしいものである)のことであつた

が並立するが、その頂上の狭い兩側の削り落されたしかし人の通過出来る岩尾根を指してウメノキドーリ、カビノキドーリと云ふさうである。若し漢字をあてるとすれば「通り」であらうか。

トウ 峠のことであつて、トウゲも同様に用ひられる。地名としては山國川の北では皆峠をトウゲと讀み(古峠、野峠、藥師峠等)トウは南側に限られて居る様である(大石峠はオイシガトウである)一體豊後ではトウの場合が多いのでオイシガトウの如きは豊後の影響であらう。

ト 戸の漢字をあてるべきかと思はれるが、谷や尾根で一寸とした斷崖が戸を立てた様に人の通行を妨げる様なのに用ひられる。山村の人々は一體に此のトを非常に警戒して山を歩く様だ。

イオト 洞窟或は岩窟のことであつて岩戸であらう。犬ヶ岳の筈といふ一峯の北側に地蔵イオトといふのがあつて水には少し遠いが理想的な岩小屋である。

ヒラ 又は **ヘラ** 山の比較的に廣い斜面を云ふので、平の漢字があてられる。大平山の如きはヒラの大きな山の意味を最もよく表はして居る山である。

オトシ 會報二十五號にはこれを小さな瀧として報告されて居るが、耶馬溪の津民あたりでは斜面の一部で薪や木材を捲き落さねばならぬ様な斷崖又は非常な急斜を云つて居る。従つてこれは地形そのものに與えられた言葉と云ふよりはむしろ山稼ぎの立場から出た言葉であらう。

二、特に溪谷に關するもの
耶馬溪の様な狭谷地形の多い處では溪谷に關する特殊な言葉のあるであらうことに多大な期待をかけたのだが余り收穫はなかつた。

ナメラ (時にナベラと聞える)といふ一枚岩の溪流にあてられて居る言葉は可成よく行き亘つて居る。

三、ノ(野)とヤマ(山)
ノ(野)とヤマ(山)の持つ意義についてばかり書いた如く(山岳第廿七年一號)山は普通に考へる地形的な意義の他に樹林地を一般にヤマといひ樹林を失つた草地をノと云ふことは耶馬溪地方に限らず九州一圓皆同じである。英彦山の大部分側で新谷に近く大野と云ふのがある、八百余米の草山で「大きな草地」を意味する。但し土地ではオホノではふしにウノと發音してゐることはかつて九重山で大窓をウマドと發音することを報告したと同様である(山岳

第廿七年一號)。
ノの一種にカンノがある。これは肥後あたりのコバであつて山の焼畑を意味する(會報二二號及び二四號のものとは多少異なる)柳田先生の山村語彙には「九州では一圓に山畑をコバと謂ひ、地名には常に畑字を宛てゝ居る」とあるのがそれである。

四、植物に關するもの二三
イゲ 棘のある植物の總稱である。カンカライゲはサルトリイバラであり、イゲボタンはキイチゴのことらしい。

ミコシグサ ゲンノショウコのことである。裂開した時の形狀から來て居る。(一九三三・一二・二)

靴と糠 靴と云つても糠に釘をもぢつたのではない。判じものでもない。靴の手入や保存に糠を利用することである。

或る高名な乗馬家が乗馬靴に糠を入れて居るので故を問ふと、靴が糠の油を吸つてとても柔らかになる。

長年やつて居るがこんなに具合のいいものはないとの事であつた。ふとそれと思ひ出して山靴やスキー靴に試みたが、非常に好成績のやうである。御承知の如く糠はかなりに脂肪分を含んで居るが、同時に靴の外側には普通の靴油を塗つておくと、外内呼應して革の内部までよく油が行渡り、實に柔らかになる。而も内側は糠油だから靴下を汚すやうなことはない。尙ほ私は糠を固く詰め込むことによつて同時に靴型の代用にもしようと思ひしたが、これも相當成功

であつた。全く一舉兩得である。唯防水や耐寒の點については私は何も申述べる材料がないので諸氏の御實驗を俟ちたいと思ふ。とにかくは出入りの米屋に云へば只でくれし、日本では廣く利用される可能性があるやうに思ふので、紙上の一隅を借りて御披露する。(〇生)

圖書室來訪者調べ

一月	一八六
二月	一二二
三月	一二三
四月	八六
五月	七四
六月	七九
七月	七一
八月	三八
九月	七三
十月	七四
十一月	五八
十二月	四六(十六日迄)
合計	一、〇三〇名

一月中理事室在室當番順

八日(月)	福島
十日(水)	逸見
十二日(金)	飯塚
十五日(月)	伊藤
十七日(水)	神谷
十九日(金)	黒田
二十一日(月)	松方
二十四日(水)	三田
二十六日(金)	額田
二十九日(月)	田中
三十一日(水)	鳥山



山の消息

日光雲龍峽の避難

東京山旅俱樂部員早川博雄氏の遭難に關し本會宛詳細なる報告あり。早川氏は十一月十八日夜行にて單身出發、日光雲龍峽谷湖の途上、友不知の手前燕岩及び廻廊下の中間、無名の谷へ、百數十米の斷崖を轉落惨死せり。十一月二十二日午後八時四十分が遭難時間と推測、年齢十九同會にては十二月三日牛込紅屋にて遭難報告あり、尙會報「獨立樹」第十二號を追悼號として發行の由

國立公園に建つ小屋建築

設計圖案の懸賞募集

國立公園候補地十二ヶ所「阿寒」「大雪山」「十和田」「日光」「富士」「日本アルプス」「吉野及熊野」「瀬戸内海」「大山」「阿蘇」「雲仙」「霧島」は既に調査を了へ、近く正式指定の運となるべきもので、宿舎等の建設に着手する處も尠からず、殊に山小屋は相當多數の建設計畫されつゝあるを以て、この設計に當りては

外觀（周圍の自然的風致との調和）建築材料及構造（附近にて得らる、材料を用ひて堅牢なること）設備（登山者の疲勞を醫するに足り快適にして衛生的なること）等につき優秀なる設計圖案を得て之を推舉せんとす、依つて此際國立公園協會と建築學會とは協力して國立公園に建つ山小屋の建築設計圖案を一定の規定に依りて募集せり、特に斯道に經驗と興味とを有する會員各位は應募せられんことを希望する次第である。（日本山岳會に依頼されし趣旨概略）

設計圖案の提出期限は昭和九年二月十日正午、届先は東京市銀座西三丁目一番地、建築學會事務所宛、建築費は三千圓内外、延面積數百五十乃至二百平方米、收容人員五十名乃至八十名、當選賞金一等二百圓、一名、二等百圓三名。

其他應募規定の詳細は建築學會事務所に問合せありし

冬の山小屋調査追補

▼吾妻山麓平ヒュッテ 收容百名食糧準備あり、一泊五〇錢、一泊貳付八〇錢、十一月より四月迄小屋番人滞在す。

一、北海道大雪山方面

▼（イ）黒岳石室旭川市七條通十丁目旭川警察署宛照會の事

▼（ロ）旭岳石室 冬期閉鎖

▼（ハ）愛山溪温泉（舊稱直井温泉）冬期番人滞在、收容約三十名、寢具燃料有、食糧、米、味噌有、尙照會を希望す（北海道旭川市上川支廳内道中部保勝協會、野田健夫氏宛の事

二、十勝岳方面

▼白銀莊 ベッド九人、寢燃其他充分有、食糧なし、使用料一人一夜一圓、番人常住、使用は特定人許可制、道廳管、吹上温泉より六丁。

▼勝岳莊 收容人員三人乃至五人、寢具、赤毛布一人分一枚宛あり食糧有、宿泊料一人一夜五〇錢、各一食三〇錢、辨當ニヤリ飯二〇錢、小屋番有、公開、吹上温泉より五丁十二月二十日頃より開業。

▼夢山小屋（八ヶ岳火山群）位置信州北佐久郡芦田村、大門峠頂上より南へ約一キロの地點、池ノ頭。收容二〇名、番人常住、寢具食料あり、一泊二食一圓、三食付一圓貳拾錢、風呂の設備あり、二棟。

圖書紹介

陸地測量部新刊地圖目錄

五萬分一地形圖修正

高田	飯山
新潟	高田西部
新湯	飯山
横須賀	只見
飯田	鹿野
富山	伊那
松山	魚津
標津	松山南部
斜里	西別殖民地
留萌	計根別
山口	摩周湖
	妹背牛
	萩

（昭和八年十一月三十日）

會務報告



十二月定例理事會

十二月六日（水）午後六時半本會事務所にて

出席者 小島 高嶺 島山 横松 本角田 伊藤 神谷 芥木 黒田

一、新任理事の件（横松）

會員中より理事候補者の投票なきを以て、役員總會の推薦により六氏を來年度新任理事に當選と決す（別項七頁参照）

一、會員大會開催に關する件（小島）

一、山日記編輯の件
來年度改めて山日記係を選任の上編輯出版のことに決定

一、會計報告（神谷）

會計大會記事
十二月七日午後六時半より赤坂三會堂に於て開催せり

小島會長より八年度に於ける一般會務並に來年度新任役員選舉に就き説明あり、伊藤理事は本年度に於ける本會事業山小屋、山日記、寫眞展覽會、高山深谷其他に關する報告をなし、次で神谷會計理事より本年度會計及明年度豫算に就き詳細なる報告あり、八時半閉會す。

出席者左の如し
酒井忠一、大澤照貞、小島久太、

神谷恭、澤智子、伊藤秀五郎、冠松次郎、澤井德太郎、吉田禮二、原田恭雄、名古屋常治、松本善二、近藤恒雄、高頭仁兵衛、佐藤誠次郎、芥木猪之吉、島山梯成、多賀富藏、高橋良之助、齋藤成三男、淺原重繼、飛川維之、岩崎京二郎、山口清秀、行方沼東、小野金太郎

會員計報

名古屋市 賀古御蓋氏（昭和五年五月入會、會員番號一一七三）
昭和八年十二月 日付計報に接せり
本會は茲に謹而哀悼の意を表す。

退會者

昭和八年十一月
（四〇八）京都市 本野 精吾
（五七）和歌山縣 久保 雅友
（三六七）京都市 田邊 朝郎
（八九七）神戸市 ゴースデン
（八七六）大阪市 水谷 陳
（八七九）東京府 東京市水源 林事務所

新着圖書	山上 第四號	奈良山岳會
	步跡 第五一號	テクリ會
	岳嶺 第一、二	東京岳嶺會
	山寮 創刊號	神戸商業山岳部
	山 第五號	日本醫大山岳部
	山人 第三號	山人會
	臺灣山岳 第七號	臺灣山岳會
ツリースト	十二月號	
ケルン 同		朋文堂

旅 十一月號	東京曉山岳會
旅行 十二月號	東京旅行クラブ
山と溪 十一月號	山と溪の會
旅 十二月號	東京アルカウ會
山 同	横濱山岳會
旅路 同	關東旅行クラブ
アルカウ趣味 二〇號	日本アルカウ會
管見錄 十一月號	〇・K・T
獨立樹 第十一號	東京山旅クラブ
明峯山岳會々報 第十八號	
神戸アユモ會々報 十一月號	
東京登山歩流會々報 十二月號	
藏前山岳部々報 十一月號	
R・S・C・部報 十二月號	
京都山岳會々報 十二月號	
廣島山岳會々報 十二月號	
白樺旅行會々報 十一月號	
がくれい會々報 第二六號	
東京登高會々報 第二七號	
東京市山岳部パンフレット第十二號	
寫眞月報 十二月號	小西六本店
山小屋 十二月號	朋 友 堂
Appalachian Mountain Club Bulletin Vol. XXVII No.1/2	
Oct./Nov. 1933	
Prairie Club Bulletin No. 230	
Nov. 1933	
Sierra Club Bulletin Vol. XVIII	
No. 5 Oct. 1933	
The Mountaineer Vol. XXV	
No. 12 Nov. 1933	
Revue Alpine Année 1933	
39me ANNÉE	
Natural History Vol. XXXIII	
No. 6 Nov./Dec. 1933	
Svenska Turistforeningens	

Tidning Nr 7 Oktober 1933	
Planinski Vestnik Stev 3-9-10	
Ieto 1933	
The Scottish Mountaineering Club Journal Vol. 20 No. 116	
Nov. 1933	
會員寄贈圖書	
山上雷鳥著	
マツター・ホーン北壁を攀つ	
黒田孝雄氏	
臨水理學博士著	
耶馬溪彦山風景論	
鳥第一部別刷竹内亮筆	
天草鳥記事	
善多尼阿雜筆、くろばなうまのみつ	
ば、陸前船形山に於ける高山植物船	
形山高山植物目録。(村井三郎筆)	
村井三郎氏	
購入圖書	
文部省編、尾瀬天然記念物報告	
會員章を	
おつけ下さい。	
昭和八年十二月十九日印刷	
昭和八年十二月二十日發行	
發行所 角田吉夫	
編輯印刷人 額田敏夫	
發行所 日本山岳會	
電話 一六四九番	
廣告一手取扱	
電話 四六五二番	

菅沼達太郎著(新刊)

スキー・ツアー

四六判布装二二〇頁
定價 拾壹 錢圓

信越・上信・上越の國境附近を中心とし、北は吾妻山群・藏王山、西は日本アルプスに至る迄の優れたスキー地及び壯快にして比較的安全なスキー・ツアーのコース八十餘を詳説す。山・峠・高原・街道・温泉・山村——諸君は自らの興味と技倆とに應じて各種のスキー行を選擇し得其快適と安全を保證されるであらう。寫眞版六、地圖三十

田部重治編 **スキーの山旅(普及版)** 送價 一・七〇 一・四〇

泉 掬次郎著 **スキーク** 送價 一・〇〇 〇・八〇

栗原重雄考案編著 **スキーク** 送價 一・二〇 〇・一〇

笹川英三郎演技 **スキーク** 送價 一・二〇 〇・一〇

菅沼達太郎著 **山岳服裝近代色** 送價 一・八〇 〇・一〇

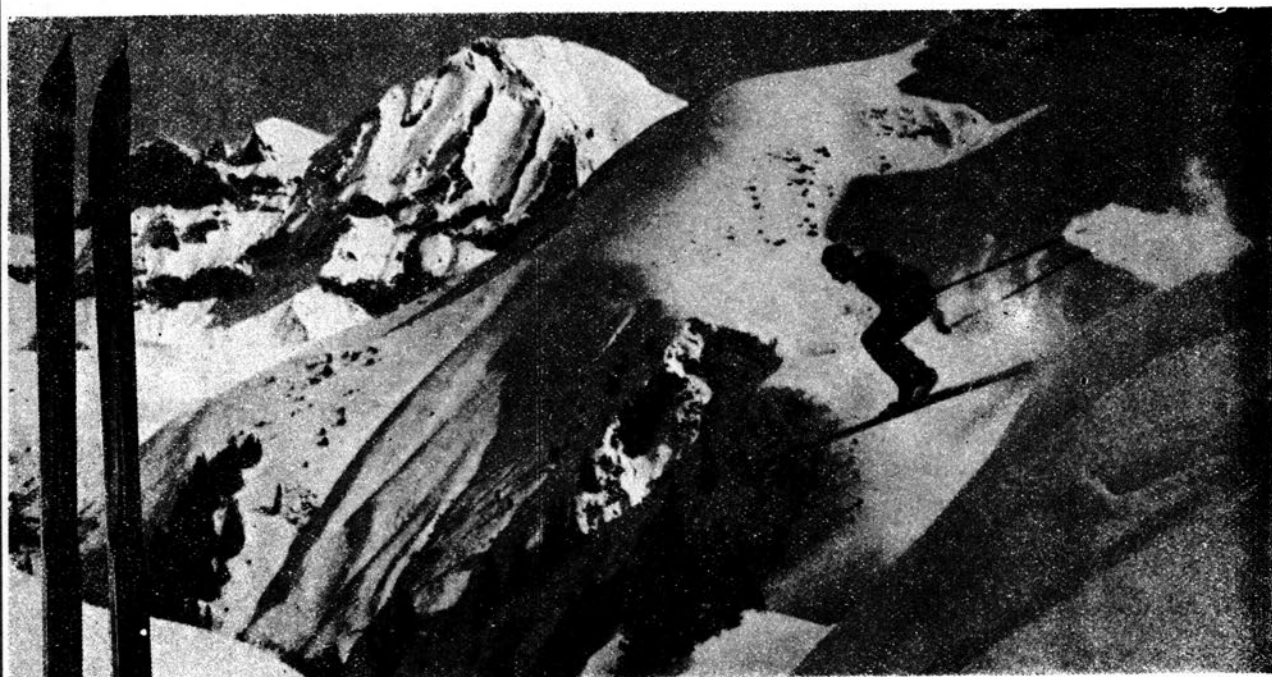
角田吉夫著 **上越國境** 送價 二・二〇 〇・一四

發行所 東京市小石川區武島町十 大村書店
振替東京四六九七五

高感光度
ハレーション防止
同時に
さくらフイルター
もお忘れなく

高感光度
強彩色性
微粒子

りあに店科材真寫處る到



スラロームスキー

アムスツツモデルとして粉雪舞ふ處 アールベルグやサンモリツツで歴倒的な使用を受けつゝあるもので中歐に於て華麗なテクニックを競ふ方々の此上もなく好むタイプです。一九三四年のモダンスキースポーツを楽しまれんとする方々に御推奨致します。

ヒツコリー材 ￥15.00 — ￥230)

イタヤ材 ￥4.00 — ￥8.00

神田小川町

美津濃

銀座五丁目

門專靴ーキスと靴山登

於各種博覽會
名譽賞牌受領



秩父宮殿下
高松宮殿下
澄宮殿下
朝香宮殿下
竹田宮殿下
北白川宮殿下
山階宮殿下
賜御用命

(カタログ進呈)

店靴崎山

角丁横大谷四京東